

インタビュー

DIIC(株)
新事業統括本部エレクトロニクスビジ
ネスユニット マネジャー

西 英史氏

創業時から印刷インキ、有機顔料、合成樹脂など化学メーカーとして百十余年の歴史を有するDIIC(株)(東京都中央区日本橋3-7-20、03-6733-3000)。最近では、社会課題と社会変革を起点とした新たな事業の創出に取り組む新事業統括本部が



シングする自社オリジナル製品としてIoT無線センサー「ハットトップ」を上市された。同本部エレクトロニクスビジネスユニットマネジャーの西英史氏にハットトップ誕生の背景、センサー拡充の方向性、今後の展望などを聞いた。

柔らかい無線センサーを上市

社会課題の解決が主眼

た。

——貴社初のIoT無線センサー製品が上市されました。誕生の背景は、

西 中長期を見据え、かつ社会課題解決に貢献する側面から、新事業統括本部の新規事業部門として、いくつかの分野が立ち上がっている。その中の一つであるエレクト

ロニクス分野では、基板向けなど材料自体で差別化することに加え、もっと下流に下りて、さらに付加価値を高めることにも挑戦しようという取り組みが3〜4年前から始まった。そこで誕生したのが今回のIoT無線センサー「ハットトップ」。

——具体的にごんな二

ーズから。

西 成長が見込まれるIoT分野の最終製品を手がけることで、エンドユーザーに近いところのニーズを把握しつつ、当社の材料や工業用粘着テープを活かせる製品というコンセプトでのスタートだった。お客様にヒアリングを重ねるうちに、

るを得なかった部分の自動化による省人化と、24時間の自動化された常時監視も可能になるという2つの面に貢献することができる。また、集合住宅や介護施設での常時見守りにも同様のニーズがあった。

——だから各種センサー製品群を擁するのです

ね。

西 これらの需要を満たすためには、設置性の良い、薄型・小型で柔らかい筐体を持ちながら、正確なセンシングと長距離通信能力、長い電池寿命を持つセンサー製品群が必要不可欠。そこで各種要求を満たす最適なデ

バイス群を選定し、センサー製品を開発した。当社は化学企業であるので、生産は外部へ委託している。薄くて柔らかい構造ながら正しく測れる部分が最大の特徴であり、特許も出願中。落下しても安全、かつ当社の工業用粘着テープで簡単に設置・移設ができ、約

年度内にはCO₂、気流、PM2.5などのセンサーを見据えている。

現在法律で義務化されている「ビル衛生管理法」では、一定以上の面積の商業ビルにおいて2カ月間に1回、温湿度やCO₂、CO、粉塵、気流を測定することが義務づけられており、人が巡回しながら測定している。ハットトップは目立たず、どこにでも貼れる。この利点を活かし、空気環境測定

5年の長い電池持続時間を持つ製品でもある。

——今後のラインアップ拡充の方向性は、

西 ハットトップという柔らかく薄い構造をそのままに、センサー種類を拡充する予定だ。21年度内にCO₂センサー、距離センサーを、22〜23

ンターが担う。また、通信には受信機1個で長距離通信が可能なLoRaWANを採用し、システムコストを抑えている。この受信機もお客様もしくはソリューションベンダー様の選択となる。

——今後の展望を。

西 21年前半には、工事現場の熱中症警告ニーズ対応などへ、IPX6相当の防水性を持つ屋外用の上市を予定している。前述の各種センサー拡充品を含めて、23年に売上高3億円達成を目指すしていく。電波法の関係

もあり、新製品は国内向けとなるが、需要があれば海外展開も検討していく。労働人口が減少するなか、自動化に貢献する

ことで社会課題の解決につながる。そんな役割を担える新規製品群の創出に邁進していく。

(聞き手・高澤里美記者)